

作文に見る 昭和の風景

昭和51(1976)年にスタートした「小さな親切」作文コンクールは、今年度「50回」の節目を迎えました。奇しくも今年度は、昭和元(1926)年から100年目にあたり、「昭和100年」として昭和時代を振り返るイベントなどが各地で行われています。そこで、私たちも50回と100回を記念し、当コンクールで入賞・入選を果たした昭和の作品をご紹介します。当時の作品から、昭和の空気感を味わってみてください。

注：作文は一部抜粋して掲載しています。

昭和52年 第2回 作文コンクール 総理大臣賞

ひがんばなをあげたこと

鹿児島県 蒲生小学校 1年 いぢち ひろし

ぼくのおじいちゃんは、花がとても好きです。花をよくとってあげると、
「よか、まごじゃ。」
と、あたまをなでてくれます。
きのうは、にわのすみっこに「ひがんばな」がさいっていたので、とっていきました。
「じいちゃん。“花火”じゃって、ほら。」といって、あげました。
「こら、きれいなもんじゃ。ほんとに花火んごちゃいね。」
と、大きなこえでわらいました。
「そいなら、ばあちゃんにあげようか。」
といって、しゃしんのところにあげました。
「ちーん。」とかねをならして、おがみました。ぼくも手をあわせました。おじいちゃんは、ながくながくおがんでいました。
「おおきにねえ。ばあちゃんと、ふたりぶんじゃっよ。」
と百円くれました。ぼくは、
「ばんざーい。ばんざーい。」
とうちをとびまわりました。
「じいちゃん、百円くれたから、かたを百たたいあげるから。」
といって、百たたいあげました。おじいちゃんは、
「よかきもっじゃ。よかきもっじゃ。」
といって、目をつぶっていました。

【肩たたき】

おじいちゃんと孫のほのぼのした日常。祖母や親の肩たたきをするのは、昭和の子どもの役目であり、おこづかいを稼ぐ手段でもあった。なお、初代審査委員長・渋谷秀雄氏(実業家・渋谷栄一氏の息子)は、「思わずホロリとさせられた。童心の清純さがなんの飾り気もなくにじみ出している。平板極まる日常生活の中に潜む微妙な心理を見事にとらえ、“必要にして十分”な内容の作文にまとめている」と高く評価した。



【火の用心の夜回り】

今から約400年前、火事の多かった江戸で始まったといわれる「火の用心」を呼びかける夜回り。現在も実施している地域はあるが、注意を引くためにカンカンと鳴らす「拍子木」の音がうるさいとクレームになったり、少子高齢化のため人員が確保できず、廃止となったりする地域も増えている。子どもたちの「火の用心」の声や拍子木の音は、懐かしい昭和の響きになる日も近い。

昭和54年 第4回 作文コンクール 入選

はじめてまわった火のようじん

福井県 高椋小学校 1年 川端 紀邦

「のりくにちゃん、“ひょうしぎ”つくったぞ。7じはんになったらいきね。」
と、おじいちゃんはぼくに、あたらしいひょうしぎをくれました。
ことしぼくは、一年生になったので、なつやすみのあいだ火のようじんにまわります。
ぼくと、こうじくん、やすたかくん、きよしくん、かずおくんの5人でまわります。まいにちまわるのです。ぼくはゆうごはんのとちゅうに、こうじくんがよびにくるのがいやでした。くらくらって、しずかなみちをまわるのがいやでした。それに、まえださんのいえのまえにはいつも白い犬がいます。ぼくがふざけていると、にらみます。
「なんでまいにち、火のようじんにまわらなあかんのやろ。ぼく、もういやや。」
と、お母さんにいうと、
「かじはいつおこるかわからないから、まいにち、まいにち、きをつけなといけないのよ。のりくにちゃんのこえをきいて、みんなが火のようじんにきをつけるといいね。」
と、おしえてくれました。
ぼくたち5人は、「火のようじん。マッチ一本かじのもと。」と、大きなこえでまわりました。
おわって、ぼくがかえると、おじいちゃんがたんぼのところまでむかえにきていました。
「ごくろうさん。はよ、うちにはいんね。ごはんまだやろ。」
と、ぼくのあたまをなでてくれました。ぼくは、うれしくなってくびからひょうしぎをはずしました。
はずしてもまだぼくのこころに、ひょうしぎのおとがなっていました。

昭和56年 第5回 作文コンクール 優秀賞

牛乳屋さん ありがとう

栃木県 壬生小学校 3年 田村 規雄

朝です。ぼくはまだねどこの中でした。
牛乳屋のおじさんが、ガチャガチャと牛乳ピンをゆすりながら、僕の家にはいたつする音がきこえてきます。
耳をすましていると、「ジャー、ジャー。」という音もします。何だろう、と思ってまどから見てみると、おじさんはあきピンの中にとまった水を一本一本すてていました。
ぼくの家では、毎日のんだ牛乳ピンは、水できれいにゆすいで出していました。でも少しずつ水がたまってしまっていたのです。
「よし、今日からぼくが、水がたまらないようにしてあげよう。」と思いました。
ぼくは、その日から、毎日牛乳ピンをゆすいでかならずピンをさかさにおきました。きれいに水をきった、きれいな牛乳ピンをだしておくと、牛乳屋のおじさんはいつもきれいに、持っていってくれました。
この間、どういうわけか、いつもよりおくれてぼくが学校に出かけるころに、牛乳屋さんがはいたつにきました。そしてぼくの顔を見ると、
「牛乳ピンをきれいにしてくれて、ありがとう。」
と言いました。
ぼくはとてもいい気持ちになりました。

【朝の牛乳配達】

昭和30～50年代、多くの家庭が利用していた牛乳の宅配は、家の軒先に置かれた木箱に毎朝牛乳が届けられ、飲み終わった瓶を箱に入れておくと回収されるシステムだった。紙パック入り牛乳がスーパー等で販売されるようになると牛乳配達は徐々に減り、大手乳製品メーカーは近年瓶入り牛乳の販売を終了。牛乳配達はまさに、昭和の朝の風景だった。



令和の親切も大募集!
第50回 「小さな親切」作文コンクール
テーマ: 「小さな親切」
応募資格: 小学生・中学生(小中学生と同じ学齢のものを含む)
応募時数: 1,200字以上(題名、氏名等は含まず)
締め切り: 2025年9月22日(月)必着
詳細は「小さな親切」運動WEBサイトをご覧ください。

